

令和2年度 第1回市川市史編さん委員会

令和2年11月10日(火)

会議次第

- 議 題
1. 第5巻の刊行について
 2. 刊行計画の見直しについて（諮問）

報 告 令和2年度の事業内容について

議題資料

- 資料1 刊行計画
- 資料2 第5巻刊行時期について
- 資料3 諮問書（写）
- 資料4 通史編専門部会検討内容について（報告）
- 資料5 通史編に関する現状と今後の課題
- 資料6 市川市史目次

第 5 卷刊行時期について

1. 第 5 卷刊行延期について（経緯報告）

第 5 卷（民俗編）は、令和元年度に刊行予定であったが、編集過程において、以下の事態が発生したため、昨年度中の刊行を見送ることとなった。

まず、複数の執筆者の体調不良により原稿提出の遅延および執筆辞退が生じたので、編集が予定通りに完了しなかった。次に、書籍に取り上げる内容と写真の多くが市民の協力を得た調査によるものであるため、掲載の許諾を得る必要があったが、その件数が想定以上となった。

その対応として、令和 2 年 2 月下旬から 3 月にかけて、編さん委員全員に説明・報告を行い、令和 2 年 6 月に刊行を延期することについて了承を得た。

刊行時期の変更は、市川市史編さん委員会条例第 2 条第 1 項により、市長より諮問し審議を行うべきものであるが、委員会に諮る時間的猶予がなかったため、個別に臨時報告を行い、了承を得たものである。

2. 臨時報告結果

<回答人数>

回答：8 名／編さん委員 8 名中

<報告事項に関する意見>

(1) 刊行延期について

同意する：8 名 同意しない：0 名

(2) 本件に関する意見

回答者：1 名

内容：遅れてもよいものを

市川第 20200828-0066 号

令和 2 年 9 月 16 日

市川市史編さん委員会
委員長 吉村 武彦 様

市川市長 村越 祐民

市川市史編さん事業「刊行計画」の見直しについて（諮問）

市川市史編さん委員会条例第 2 条 1 号の規定に基づき、下記事項について諮問します。

記

1. 諮問事項

市川市史「刊行計画」の見直しについて

2. 諮問事項の詳細

市川市史「刊行計画」（「市川市史編さん基本計画」別表 2）に定める第 1 巻（歴史編 I）および第 7 巻（通史編）の刊行の見直しについて諮問するものです。

第 1 巻については、令和元年度より具体的な刊行業務を開始しておりますが、新型コロナウイルスの感染拡大を受けた緊急事態宣言の発出および宣言解除後の感染防止対策により、研究機関等の閉鎖など想定外の事態が発生し、執筆・編集業務の進捗に影響が生じているところです。このことから、令和 2 年度とする刊行を見直し、令和 3 年度とすることについて諮問します。

第 7 巻については、市史編さん委員会において必要性や取扱い分野等に関する検討が重ねられてきた一方、具体的な内容に関しては第 1 巻～第 6 巻の掲載内容がある程度確定した段階で改めて検討すべきである、との意見を承ってきたところです。こうしたなか、現在までに第 3 巻～第 6 巻を刊行したこと、第 1 巻、第 2 巻についてもその内容が固まりつつあることから、第 7 巻の内容を改めて検討する段階に至ったと思われます。しかしながら、現在の進捗状況から調査研究、執筆、編集までに要する時間を考慮した場合、編さん期間終了年度の令和 3 年度内の刊行を見直す必要があると考えられます。このことから、第 7 巻の刊行について諮問します。

なお、この諮問に関する答申は、令和 2 年 12 月 15 日までに提出願います。

通史編専門部会検討内容について（報告）

<検討過程>

- (1) 第 1 回通史編専門部会
平成 29 年 10 月 13 日（金）
出席者：吉村委員、石川委員、村田委員、竹内委員、朽木委員、事務局
- (2) 第 1 回通史編ワーキンググループ
平成 30 年 1 月 12 日（金）
出席者：吉村委員、竹内委員、朽木委員、事務局
- (3) 第 2 回通史編ワーキンググループ
平成 30 年 3 月 16 日（金）
出席者：吉村委員、石川委員、朽木委員、事務局

<方針>

- (1) 民衆や市民の視点からの通史を目指す。
- (2) 本文と付録年表の構成を基本とするが、他の形式の可能性も検討していく。
- (3) 平成 30 年度から、年表作成のため近世・近現代の下作業を開始する。
- (4) 各時代により市川市域の在り方が異なるため、本文での叙述を工夫する。
- (5) 時代区分は、読者に配慮して中学校・高校の教科書に準拠する。
- (6) 本編では少ない市内の各地域の特色や、文化史的な記載を取り入れる。

<編さん体制>

- (1) 通史編の編さん体制は、巻担当者を吉村委員（正）、朽木委員（副）とする。
- (2) 各時代の執筆者はワーキンググループの編さん委員を含め 1～3 名とする。編さん委員は監修者として、章および全体の統一性を保つ。執筆者は、今後検討する。

<構成>

- (1) 通史と巻末に通史を読む際の補助的なレベルの年表とする。本文 400 頁に対しおおむね 10～20%を年表に充てる。
- (2) 各時代のページ割の目安（コラムを含む）は以下のとおりである。加えて、必要に応じて「文化・民俗」のコラムを割り振る。
原始社会：10% 古代：20% 中世：15% 近世：20%
近現代：30% 文化・民俗（コラム）：5%

通史編に関する現状と今後の課題

1. 現状の決定事項

- (1) 原始社会・古代の編集委員
- (2) 取り扱う時代のページ割合

2. 今後の課題

- (1) 中世、近世、近現代の編集委員の選出
- (2) 章立て・付録年表の具体的な内容検討
- (3) 刊行スケジュール・調査計画の策定
- (4) 年表に関する調査・検討
- (5) 執筆者の選定

分野	編集委員 (企画・監修・執筆)	分量 (%)		その他の執筆者
原始社会	石川日出志委員	80~90	10	(未定)
古代	吉村武彦委員		20	(未定)
中世	(未定)		15	(未定)
近世	(未定)		20	(未定)
近現代	(未定)		30	(未定)
コラム	朽木量委員		5	(未定)
年表	(未定)	10~20	—	(未定)

※平成 30 年度第 1 回市川市史編さん委員会資料による

『市川市史 歴史編Ⅰ－地形と環境－(通巻1)』

令和2年8月20日(編集委員会)時点

章・節	項目
第1章	市川市の地形と地質
第1節	台地と低地の地形
【折込1】	地形分類図
コラム	酸素同位体比曲線と氷期・間氷期
第2節	台地の地質
第3節	関東ローム層の層序と性状
第4節	低地を形成した新しい地層
【折込2】	大柏川・国分川・市川砂州3か所の柱状図断面
コラム	放射性炭素による年代測定法の進展
第2章	化石が語る古環境
第1節	最終間氷期の動物化石(成田層・木下層:貝類、ナウマンゾウ)
第2節	完新世の動物化石1(市川貝層:貝類・コクケジラ)
第3節	完新世の動物化石2(縄文・弥生の自然貝層:貝類)
コラム	コクケジラの生態
第4節	完新世の大型植物遺体－国分川・大柏川流域を中心に
第5節	完新世の微化石(珪藻と花粉)
コラム	三番瀬のカキ礁
第3章	環境変化と人間活動
第1節	最終氷期の市川
第2節	海面変化と貝塚の形成
第3節	「真間の入江」の伝承と実像(弥生・古墳・奈良時代)
第4節	市内出土の石材産地とその移動
コラム	古墳～平安時代の石材について
第4章	市川の自然災害
第1節	古文書記録に見る災害史
第2節	江戸時代の災害
第3節	市川を変えた明治・大正期の水害(放水路の建設・製塩からノリ養殖へ)
第4節	都市化と現代の災害
コラム	市川市の災害文化
第5節	自然災害の将来予測(ハザードマップ)
附篇	
	市川市域の炭素14年代一覧表
	市川市域の災害年表

『市川市史 歴史編Ⅱ—ムラとマチ—(通巻2)』

令和2年8月7日(編集委員会)時点

章・節	項目
第1章	最古の狩人とその暮らし —旧石器時代—
第1節	ローム層に潜む文化
第2節	石器の種類と地域色
第3節	旧石器時代から縄文時代へ
第2章	縄文の海と貝塚 —縄文時代—
第1節	貝塚の時代
第2節	縄文の海と貝塚の形成
第3節	縄文人の道具箱
第4節	食料資源—海の幸・山の幸—
第5節	縄文人の身体
第3章	社会の変動とムラの展開 —弥生～平安時代—
第1節	稲作のはじまりと環濠のムラ
第2節	葛飾の覇者の出現とムラの変貌
第3節	国府をめぐるマチとムラ
第4章	鎌倉～戦国時代の村町のすがたといのり —鎌倉～戦国時代—
第1節	中世房総の荘園公領と環境
第2節	鎌倉時代の市川
第3節	南北朝～室町時代の市川
第4節	戦国時代の房総と市川
第5節	板碑にみる中世市川の信仰と郷村
第5章	海辺に生きる —江戸時代—
第1節	塩浜由緒書と小宮山奎進
第2節	行徳塩と諸産業
第3節	江戸川と行徳
第6章	街道沿いのムラとマチ —江戸時代—
第1節	道標からみた市川の人びとの境界意識
第2節	浮世絵・絵図にみる街道の町場
第3節	宿場につながる交通
第7章	台地の人びと —江戸時代—
第1節	台地の自然と人びとの生活
第2節	御用留の世界～曾谷村と北方村の営み～
第3節	幕末維新期の激動を駆け抜けた与吉の生涯
第4節	ドキュメント市川・船橋戦争

『市川市史 歴史編Ⅲ－まつりごとの展開－(通巻3)』

章・節	項目
第1章	葛飾の覇者とヤマト王権
第1節	ヤマト王権とフサ
第2節	フサの豪族と古墳
第3節	葛飾の覇者
第4節	下総国葛飾郡の成立
第2章	国府と国分寺－「まつりごと」と「いのり」
第1節	国府と郡家
第2節	国府と郡家のまつりごと
第3節	文字による支配
第4節	国分寺の建立と変遷
第3章	手児奈と孝標女－国府の景観とみち－
第1節	万葉集にみる古代の市川
第2節	国府の景観
第3節	国府のみち
第4節	ヒトの動き モノの動き
第4章	古代国府から中世府中へ
第1節	変わる遺跡と遺物
第2節	下総国の変容と反乱
第3節	房総の復興と武士団の成立
第4節	源頼朝と国府
第5節	千葉氏と府中・真間の館
第6節	日蓮の往来と富木常忍
第7節	中山法華経寺の成立
第5章	守護と戦国権力の進出
第1節	下総守護千葉氏と市川
第2節	鎌倉公方・古河公方と市川
第3節	小田原北条氏の進出
第4節	小金高城氏の支配
第5節	小田原北条氏の終焉と徳川家康の関東入部
第6章	江戸幕府と市川の支配体制
第1節	近世市川の成り立ち
第2節	様々な支配体制
第3節	幕藩体制の動揺と市川
第4節	黒船来航と幕末の混乱

『市川市史 歴史編Ⅳ－変貌する市川市域－(通巻4)』

章・節	項目
第1章	現代市川のすがた
第1節	市川市が誕生するまで
第2節	高度経済成長期における市川
第3節	昭和から平成への転換期における町域再編と変容
第4節	二一世紀を生きる
第2章	市川を中心とする交通網の展開
第1節	千葉県域における近代交通のあけぼの
第2節	都市近郊交通の展開
第3節	高度経済成長期以降の交通
第3章	江戸川と真間川
第1節	市川市を流れる大河・江戸川
第2節	都市河川・真間川
第4章	国府台周辺地域の変遷
第1節	陸軍教導団と国府台周辺
第2節	野砲兵連隊・野戦重砲兵連隊と国府台周辺
第3節	戦時下の国府台地域
第4節	行楽地としての国府台地域(戦前期)
第5節	終戦後の国府台地域
第6節	行楽地としての国府台地域(戦後期)
第7節	中国分地域の歴史
第5章	産業の変容と都市基盤整備
第1節	市川の農業
第2節	産業の変容
第3節	市川市の臨海部
第4節	外環道路と市川市
第6章	「文化都市・市川」を掲げて
第1節	特色ある教育機関
第2節	多彩な文化施設と文化事業
第3節	心の豊かさを育む
資料編	年表、統計

『市川市史 民俗編—台地・町・海辺の暮らしと伝承—(通巻5)』

章・節	項目
第1章	台地農村の民俗
第1節	ムラとクミ
第2節	住居と屋敷
第3節	年中行事と人の一生
コラム	台地と町場の民具
第2章	半農半漁村の民俗
第1節	変わりゆく行徳の生業
第2節	社会組織と近所のつきあい
第3節	行徳の町並み
第4節	社寺の祭りと年中行事
コラム	海浜地帯の民具
第3章	町場の民俗
第1節	市川・八幡の発展
第2節	町場の祭り
第3節	地藏山墓地の墓石と墓地空間
第4節	八幡の農具市
コラム	市川ゆかりの民俗学者 本山桂川
【折込】	八幡農具市 見取図
第4章	信仰と暮らし
第1節	ムラの神仏
第2節	村落寺院の展開
第3節	中山法華経寺をめぐる講集団と寺院行事
第4節	オビシャ
第5節	エビスコウ
コラム	江戸川の船頭と大杉祭
第5章	暮らしのなかの語り
第1節	豊かな口語りの世界
第2節	歴史や信仰にまつわる話
第3節	昔話、動物が出てくる話
第4節	生活譚
第5節	ライフヒストリー
第6節	木遣り

『市川市史 自然編―都市化と生きもの―(通巻6)』

章・節	項目
第1章	市川市の地形と気象
第1節	地形の概要
第2節	気象の様子
第3節	水の動き―湧水から川へ―
第4節	東日本大震災の水辺への影響
第2章	市域の自然の姿とその変遷
第1節	むかしの植生を推測する―縄文・弥生時代～近世―
第2節	低地に水田が広がっていた時代―明治・大正～昭和前半―
第3節	都市化が進んだ時代―昭和後半～平成―
第3章	都市に暮らす生きもの
第1節	都市化と都市生物の登場
第2節	人と共存するツバメ
第3節	都市鳥の暮らし―鳥から見た都市環境―
第4節	街なかのヒキガエル―ヒキガエルが暮らせる町とは―
第5節	戻ってきたタヌキ、進出するハクビシン
第6節	市川の帰化植物―研究の流れと現状―
第7節	市川の外来生物
第8節	身近に暮らすさまざまな動物
第4章	残された自然と保全の取り組み
第1節	残された市川の林
第2節	市川のクロマツ―街なかの黒松群―
第3節	谷津の保全
第4節	真間川水系をめぐる取り組み
第5節	江戸川―山と海をつなぐ―
第6節	市川の花畑―埋め立てのはざままで―
第7節	行徳野鳥観察舎の歩み
第5章	市川市の動植物
第1節	植物の種類相
第2節	動物の種類相
第3節	市川市を模式産地とする動物
第4節	市川市の動植物目録)